

クウェート政府奨学金

2006年—2007年度留学生

住めば都—女子寮生活—

中央大学総合政策学部国際政策文化学科卒 佐藤 千尋

クウェート留学に興味がある皆さんにとっては、「住居」が気になる場所かと思います。そこで今回は、寮での生活について少しご紹介したいと思います。

語学センターで勉強できたことはもちろんですが、私のクウェート留学の中で一番よい経験になったのは、女子寮(Sakan Al-Talibat)での日々の生活です。語学センターの学生の中には、寮に不満を持っている人も沢山いましたが、私にとってはとても居心地が良く、学ぶことが多い場所でした。2006-2007年当時、クウェート大学女子寮には約180人の女子学生が生活していました。部屋は1人1部屋、2部屋が繋がっており、洗面台(2つ)・トイレ・シャワーを共用します。

女子寮の中で私の様にアラビア語を勉強するために1年の期限でクウェート政府の奨学金で留学している学生はたった16人、その他は学部で勉強する学生でした。学部生の大部分は、近隣の湾岸諸国からの留学生、他にアジアやアフリカから来ている留学生です。アラビア語を母国語としない留学生も、その多くは中学時代から親元を離れてクウェートで寮生活しているので、全く問題なくアラビア語を話すことができます。要するに、私の様な「外国人」は寮の中のごく一部だということです。私のアラビア語力が不十分なため、気を使って英語で話しかけてくれる学生も沢山いた事も事実ですが、自分の努力次第では24時間アラビア語を練習できる環境にあるというわけです。

私には幸いほとんど英語を話さない湾岸出身の友人が居たため、アラビア語学習の大きな助けになりました。彼女たちの部屋で過ごす時間も自然と多くなり、各自自分の部屋があるにもかかわらずお泊り会をしたこともありました。語学センターではしばしばクラスメートとグループでこなす課題が出されるのですが、その課題のでき具合をチェックしてもらったり、彼女たちの英語の宿題を手伝ってあげる事もありました。勉学の点だけでなく、彼女たちとの交流を通じて、アラブ文化やイスラームを勉強することができました。オマーン料理を作ってみんなで食べたり、ルームメート(オマーン人)と夜中までお喋りしたことも良い思い出です。同じく語学センターで勉強している仲間達にもとても恵まれました。宿題を一緒にしたり、各国料理を作って食べ比べたり、互いの誕生日を祝ったり、特にイベントが無い時にもみんな食べ物・飲み物を持ち寄って寮内で集まりました。皆で外出する事もしばしばありました。寮の中では“Abla”(クウェート方言で先生の意味)と呼ばれる寮母さんたちが交

代で 24 時間体制 で私たちの面倒を見てくれました。各 Abba には受け持ちの学生がおり、私担当の Abba はいつも「あなたは私の娘なんだから何でも話さない」と温かく見守ってくれていました。Abba たちを統括している寮長も、理解のあるとても良い方でした。寮主催の様々なイベントも、私のクウェート生活を充実させてくれました。

週末には寮のバスで展示会やモール、レジャー施設に出かけたり、イスラーム 2 大祭日や卒業シーズンには寮内でパーティーがありました。女子寮には 21 時半という門限があり、厳しいと感じる人もいるようですが、私にとってはそれほど大きな問題ではありませんでした。21 時半になると、寮に戻っていることを証明するために、全ての学生が地階にあるレセプションにサインをするために下りて行きます。サインの時間は日中顔を合わせていなかった友達と話す良い機会でした。

最後になりましたが、様々な点で日本とクウェートは大きく異なります。日本の生活と同じものをクウェート留学に求めてしまうと、寮生活を窮屈だと感じてしまうかもしれません。それでも私は寮生活を通じて、語学センターで学ぶことができる以上の事を学ぶことができたと感じています。日本の常識に捉われず、クウェートでしか経験できないものに目を向ける事が、クウェート留学を楽しむ近道だと思います。